

## 保護者に指導の意図を伝えるための取り組み

### ～学年合同の活動場面を通して～

林 徳子・杉山砂寿・山中健二

日々の実践の中で保護者に指導の意図を伝える場面は多くある。幼児は生活経験を通してコミュニケーションの力を育んでいくため、日々、保護者と話し合い、教員の指導の意図を伝え、理解してもらうことで家庭での充実した親子のやりとりにつながる。指導の意図を保護者に伝えるための一つの方法として、学年合同の活動場面を通して、関わりの意図や子どもの様子の捉え方、家庭でできる配慮などを書き加えた授業記録を基に懇談を行った。そこで次の点が確認された。①授業記録にコメントを書き加え、それを基に懇談をしていくことで保護者にとって指導の意図が伝わりやすくなる。②教員間で密に情報を共有し、話し合いながら指導の意図を互いに理解し合うことで伝えたい内容がより明確になる。③実際に保護者にどう理解されたか確かめる視点を持つことが、伝え方の再考や工夫につながる。

キー・ワード：合同の活動 指導の意図 保護者支援

#### 1. はじめに

子どもは、生活の中で様々な経験を通して気持ちが動いていく。そして自分の気持ちをわかってもらえる安心感が持てると、気持ちが安定し、やりとりの意欲が高まっていく。学校生活の中で、日々教員は、子どもの気持ちの動き一つ一つを受け止め、子どもにわかるように応じていきながらやりとりの力を育てていく。また、保護者と話し合う中で、指導の意図を伝え、家庭での親子のやりとりに生かせる方法を共に考えていく。

子どもは成長の過程の中で、様々な姿を見せる。幼児期は、試行錯誤しながらも自分でやってみようとする意欲が高まる時期である。特に身辺自立に関することは、最後まで自分でやりぬくことで自信につながる。この時期、教員は、保護者に対し、子どもの取り組みを認め励ましながらかみ守ること、また、しつけとして教え身に付けさせる事柄や伝え方を工夫すること等をアドバイスし、保護者の実践を支えることが重要になる。親子でやりとりする時には、子どもを見守る時も、しつけとして教えたり身につけさせたりする時も、子どもの気持ちに寄り添い、子どもとわかり合えることが基本になる。これらのことは、生活のあらゆる場面において、折に触れて配慮し保護者に伝えていかなくてはならない。学校

生活の中でも、個別、学級活動、学年での活動等、活動形態は違っても親子のやりとりに関するねらいや配慮は同じである。しかし、実際に保護者と話をしている中で、保護者の関心が、子どもへの具体的な関わり方よりも活動内容に向いていると感ずることがある。家庭では学校のような活動は出来ないからうまく関われないという保護者の声が聞かれることもある。教員は、活動形態に関わらず、子どもと共に、わかり合えるやりとりを積み重ねていくことが重要であること、子どもは、特別な活動からではなく、毎日の生活経験を言葉に置き換えてもらうことを積み重ね、言葉を理解していくということを改めて保護者に伝えていく必要があるだろう。

今回、個別、学級、学年合同等様々な場面を通じて、3人の教員が連携しながら、共通する指導の意図を保護者に伝える方法を模索した。関わりの意図や子どもの様子の捉え方、家庭でできる配慮などを書き加えた授業記録を作成し、それを基に保護者と懇談を行った。取り組みに際して、教員間でどのようなことを話し合ったか、指導の意図をどのように保護者に伝えたか等について報告する。

## 2. 目的

学年合同の活動場面で、教員の指導の意図をどのようにして保護者に伝えたか、また、どのようなことに留意したかについて明らかにする。

## 3. 方法

### (1) 対象幼児

2 学級の幼児 10 名。

### (2) 活動の形態

週に一日、朝の仕度が終わってから、下校までの間を 2 学級合同で過ごす。通常は母親が付き添い、授業の様子を参観する。子どもの様子や活動内容によって、母親は別室で待機することもある。合同の活動は、母子分離で行った。

### (3) 保護者に指導の意図を伝える過程と内容

保護者に指導の意図を伝えていく過程として、以下のように進めた。

教員間で互いの指導の意図について話し合っておくことにより、保護者に伝える内容をより明確にする。そのために、事前事後の話し合いで情報共有を図る。また、事後の聞き取りや観察によって、どのように伝わったかを確かめ、必要に応じて補足や修正をしていく。

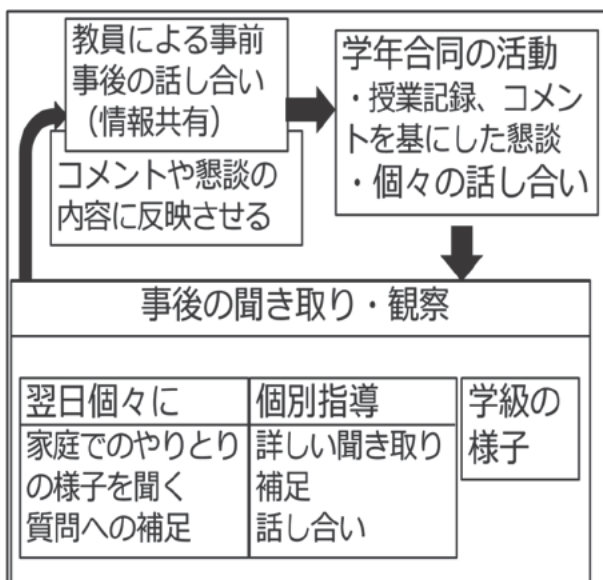


Fig.1 活動の意図を伝える過程と方法

### (4) 教員の役割分担

3 人の教員が次のような役割分担をし、活動を進めていった。役割を分担しているが、子どもの様子

に応じて適宜、交替することもあった。

教員①：活動の進行

教員②：子どもの理解に応じて声かけをする。

教員③：活動の流れ、子どもの様子、教員の応じ方等を記録し、コメントを赤字で書き加える。写真も撮る。後に記録と写真を基に保護者と懇談をする。コメントには、指導の意図、子どもの姿の捉え方、家庭での実践につなげてほしい事柄等を書く。

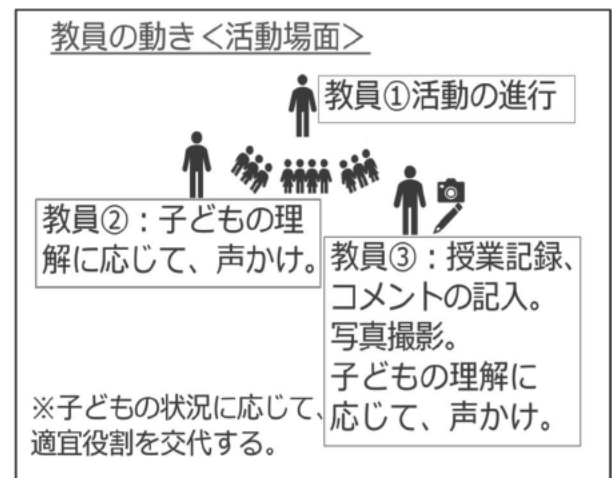


Fig.2 活動中の役割分担

### (5) 教員による事前事後の話し合い

事前には、各学級での子どもの様子、母子の関わりの様子、保護者に重点的に伝えていること、うまく伝わっていないと感じるところ等を具体的に出し合い、情報共有をする。事後には、懇談の様子や保護者とのやりとり等について話し合う。

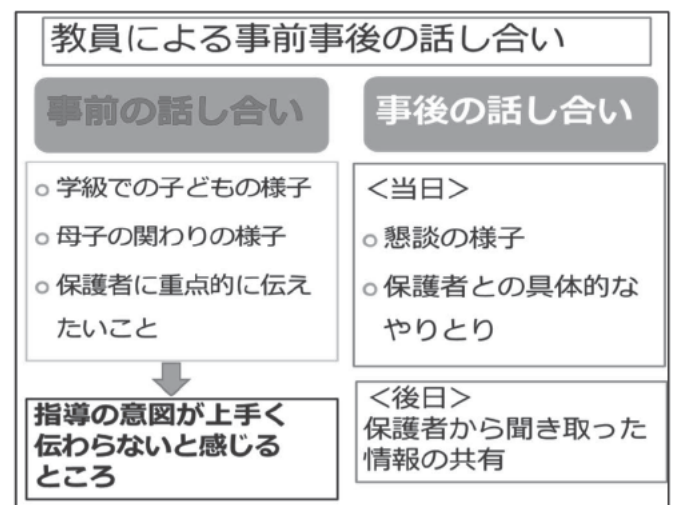


Fig.3 教員による事前事後の話し合いの内容

## (6) 授業記録及びコメントを基にした懇談

教員③が、コメントを記入した授業記録と写真を基に、保護者と懇談を行う。その後他の教員も加わり、個々の具体的な様子について補足をする。



Fig.4 懇談～下校にかけての役割分担

## (7) 事後の聞き取り

翌日、保護者から、活動に関する家庭での親子のやりとりの様子を聞き取る。聞き取りの中で、指導の意図がうまく伝わっていないところがあれば再度話をして補足する。コメントや懇談の内容を実践する上で、参考になったところや難しさを感じるところ等を個々に聞き取り話をする。可能な限り、次のコメントや懇談の内容に反映させていく。

Table1 事後に保護者から聞き取った内容例

- ・「昨日懇談で話題になったことを自分なりに意識してみました。こんなやり方で合ってますか？」
- ・「〇〇先生に、子どもの頑張ったところをほめてもらいました。どうやって子どもをやる気にさせたかも教えてもらって、なるほどって思いました。ちゃんとうちの子、出来るんだなって思いました。」
- ・「この前A先生が言ってた事をB先生にも言われちゃった。頑張らなくちゃいけないところなんですよね。やってみようと思います。」

## 4. 実際の様子

## (1) 学年で話し合われた課題と手立ての一例

## ① 子どもに関して

・生活の中で、身の回りのことを最後までやりきれないことが多い。すぐにあきらめたり、大人に頼りがちになったりする。

→自分のことを最後までやりきる経験は、言いたいことを最後まで伝えよう、言われたことを最後まできちんと分かろうとする姿に繋がる。励まされたり、友達に触発されたりしながら、時間がかかっても、最後までやりきって達成感を味わえるように見守り、声かけしていく。

・友達との関わりが少なく、遊びが広がりにくい。  
→集団でダイナミックな遊びをし、みんなで身体を動かして楽しいという経験をさせる。また、自由遊びで隣の学級の友達と一緒に遊び、いつもと違う遊び方に触れさせる。その中で、子ども同士のやりとりをたくさん経験できる場面を作っていく。

## ② 保護者に関して

・子どもの身辺自立を願いつつも、やっても出来ないのではないか、子どもがやりたがらない時に上手に促す自信がない等の思いから、子どもが試行錯誤する状況を避け、先回りしてしまう。

→時間をかけて、じっくりやればできるという子どもの成長を実感してもらうことが必要。活動場面で子どもが試行錯誤しつつやりきる状況を数多く作り、実際の見守り方や声かけの仕方を保護者と話し合う。

・生活の中で、親子で一緒に考えたり、子どもに考えさせたりする機会が持つと増えるようにしたい。  
→思考力を育てていくために「子どもに考えさせる」ことは、大切である。保護者は、そのためにどんな時にどのような関わりをすればよいか具体的な実践のイメージが持ちにくいようだ。家庭生活の中で生かせる事柄、普段の何気ない受け応えの場面など、多くの具体例を挙げながら、実践に繋げる。



(2) 授業記録とコメント

実際の授業記録とコメントの例を Fig.5 に示す。コメントには、教員間で話し合われた内容につながるよう、指導の意図、子どもの姿の捉え方、家庭での実践につなげてほしい事柄を書いた。

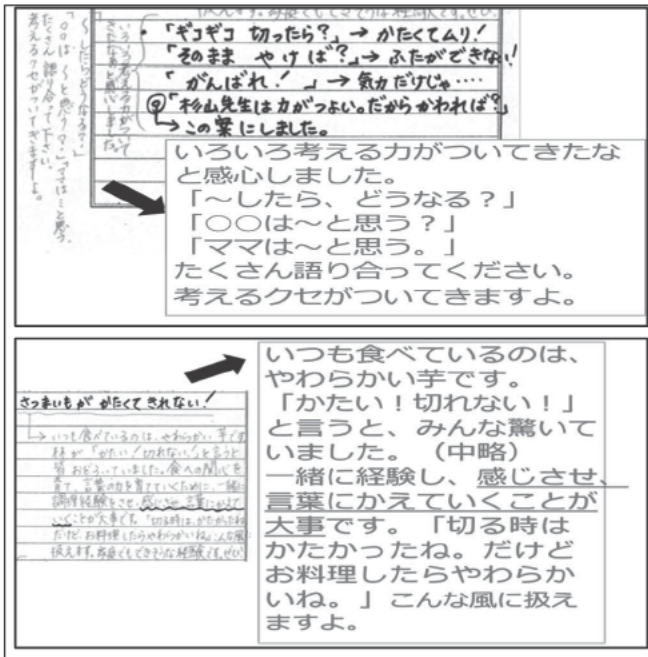


Fig.5 実際の授業記録とコメント

(3) 保護者との懇談での配慮

懇談では、コメントに書いた事柄について、他の場面での活用例を挙げるようにした。また、今の関わりが、他のどのような成長と関連があり、先々どんな力に結びつくかについても触れ、保護者が見通しを持って取り組めるように配慮した。子どもが試行錯誤したり、喧嘩をしたりした場面も話題にし、教員が子どもなりの思いや考えをどう捉え、どう応じていったかを伝え、保護者が成長の過程として肯定的に捉えることが出来るように配慮した。

Table2 懇談での配慮事項

懇談での配慮
・ コメントの話をきっかけにしながら、他の場面での活用例、活用する時の留意点などを話題にする。
・ 子どもが試行錯誤した場面や、困っていた場面、喧嘩をした場面等も話題にする。子どもの成長過程として肯定的にとらえられるように伝える。

(4) 保護者の様子

懇談で、コメントの話をきっかけに、どんな場面で活用できるか、その場合はどんなことに留意してやりとりするのか等話をしていくと、「こういう場合も同じですか？」「これはやれそう。でもなかなか難しい。」「前に同じようなことで困った。」等、保護者から具体的な質問や感想が出てくるようになった。子どもが試行錯誤したこと等について「失敗して自信をなくさないのかな？」「どこまで見守って、どこで手を貸すのか難しい。」等と日頃子育てで迷っていることを保護者同士で話し合う様子も見られた。後日、子どもなりの取り組みを最後まで見守り、「がんばったね。」と子どもと喜んでいる場面もみられた。

5. 考察

実際のやりとりを記録に残し、コメントを書き加え、さらに懇談でやりとりをしたことで、保護者にとってはポイントが絞りがやすく、指導の意図が伝わりやすかった。保護者からも家庭で子どもとやりとりする際に、ポイントを絞って話を引き出すきっかけ作りになった、と報告があった。

活動を見ながら授業記録やコメントを書くにあたっては、活動を進める教員は、指導の意図を明確に持っていることが必要であり、記録をする教員も、進行の教員の意図を的確につかむことが必要であると再確認した。

また、教員間で日常的に話し合って情報を共有し、互いの指導の意図を理解し合うことにより、3人の教員が同じ視点を持って保護者と話ができた。同じ視点を持ちながらも教員それぞれの持ち味や切り口があり、いろいろな考え方に触れながら保護者が自分なりのやり方を考えていくきっかけになったケースもあり、複数の教員による関わりは効果的であったと考える。

日常的に教員は意図を持って子どもに関わる。その指導の意図を保護者に伝えるのだが、後に、うまく伝わっていなかったと反省することも多々ある。今回の取り組みでは、教員の意図と保護者の理解に、ずれや誤解が生じていないか確かめる視点を持ち、

改めて伝え方の再考をしたり、修正や補足をしたりするようにした。確かめのために事後の聞き取りや観察をより詳細に行うことで、懇談で教員が伝えたかったことと保護者の捉え方に誤解が生じていたり、ずれがあったりしたことがわかり、早い時期に補足をすることが出来た。

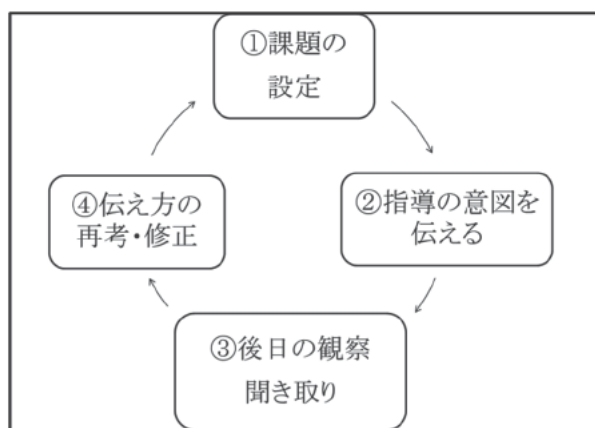


Fig.6 保護者に意図を伝えるプロセス

今回の取り組みに限らず、懇談や面談、個別指導の場で、保護者の心情や悩みを聞いたり質問を受けたりする時も同様のことがいえる。教員は、保護者の思いに耳を傾け、励ましたり、関わり方や指導の意図を伝えたりする。ここでも大切なのは、その後の保護者の気持ちの変化や実践の様子に注目することだと考える。保護者に一度伝えて終わりではなく、どのように伝わったか確かめるところまで注意深く見ていくことで、次に取り組むべき課題や新たな伝え方の模索につながるだろう。

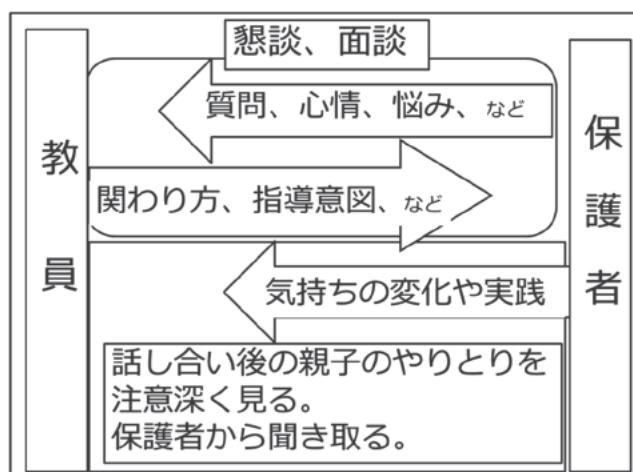


Fig.7 教員と保護者のやりとり

## 6. まとめ

今回の取り組みは、10組の母子に対して3人の教員が連携しながら関わった。学年合同の場面であったため、3人が同じ視点を持ちつつそれぞれの持ち味や切り口で持って母子とやりとりしている様子に間近で触れ、教員同士の貴重な学びの場にもなった。保護者支援は重要である。特に幼児期は保護者支援に多くの時間を費やす必要がある。だからこそ、複数の教員で話し合いを重ねながら取り組めたことは意義深いことであった。しかしながら、話し合いを重ねるためには多くの時間を必要とする。そのための時間の確保が課題である。

### 〔参考文献〕

松本末男 (2014)

幼稚部の保護者支援 聴覚障害, 69, 34-39. ジェーエス教育新社.